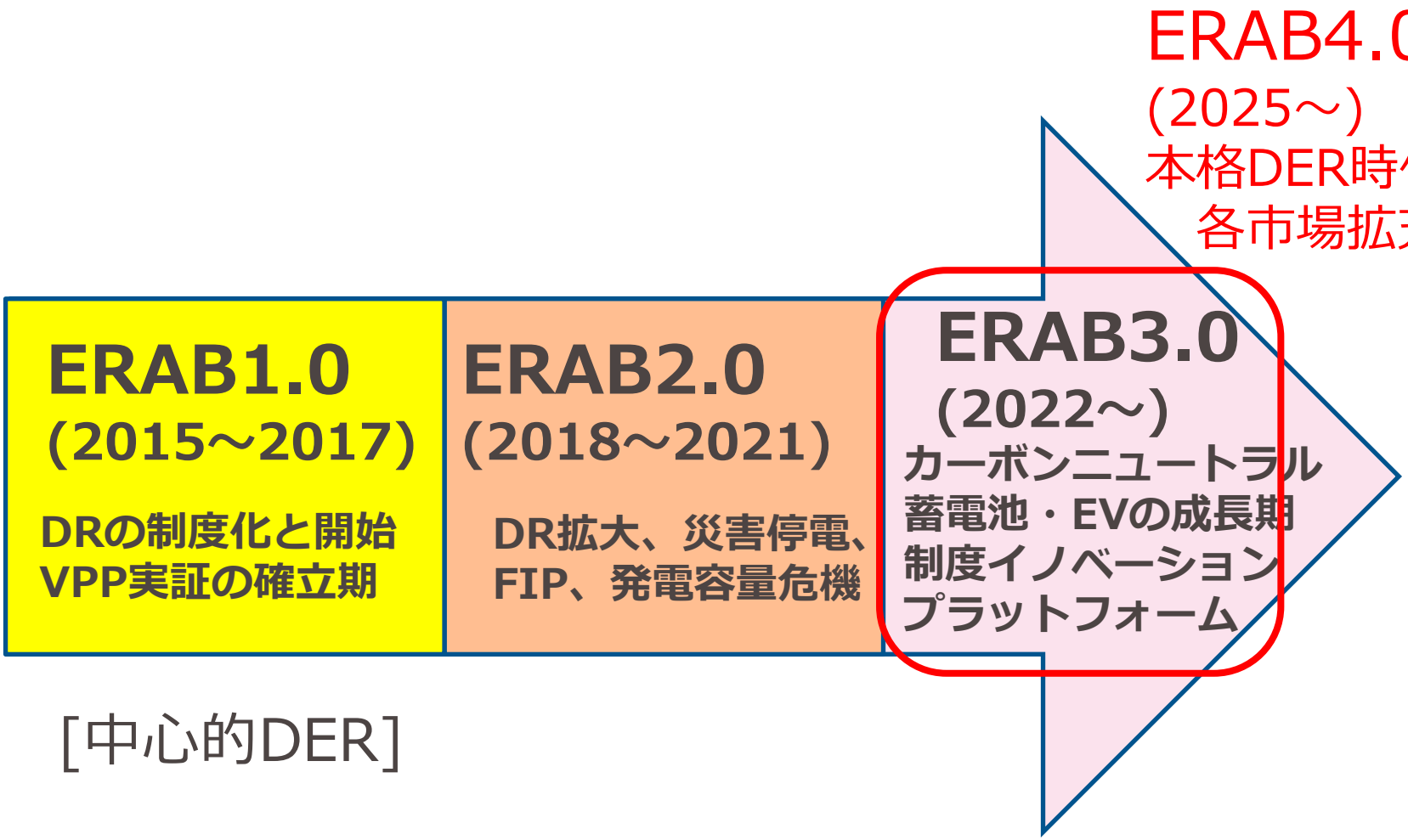
参考資料２

今後のERABステップアップに向けた論点例

大阪大学大学院工学研究科招聘教授
関西電力(株)シニア　リサーチャー

西　村　　陽

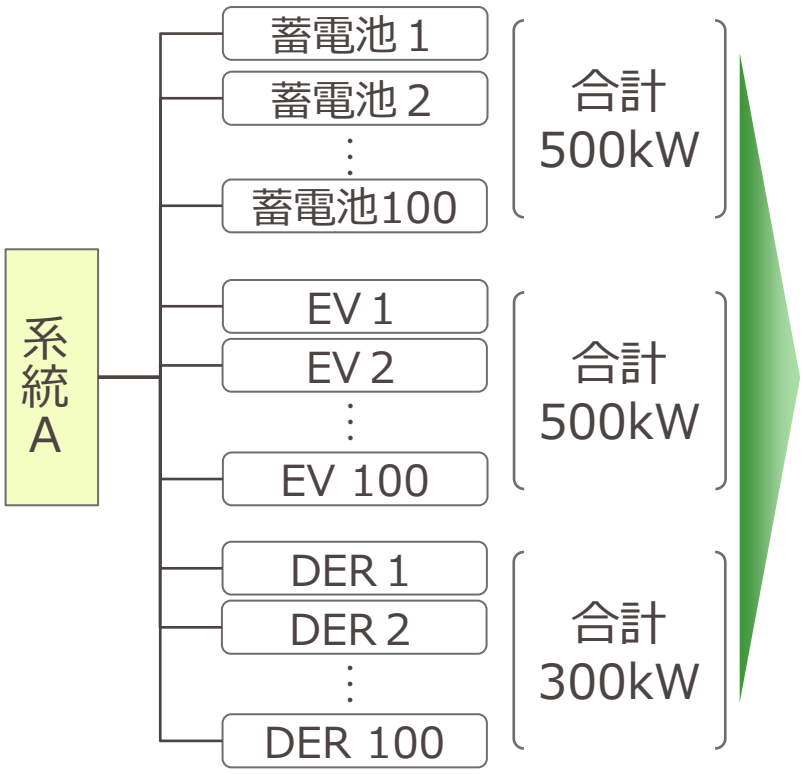
2022年～ERAB 3.0へのステップアップ



① 小規模リソース活用に向けて

○ 将来的なEVや家庭用蓄電池の大幅増加を考慮すれば、小規模リソースの実績のやり取りについて、**デジタル化等技術革新を生かした仕組みの検討が必要**ではないか。

小規模リソース活用のイメージ



○ 発動指令電源として対応した際、小規模リソースは、**個別DERごとに所定様式通りでの提出する**こととなっている。

○ しかしながら、今後、**家庭用を含む小規模リソース拡大が本格化すると、現行方式自身が合理的でなくなる可能性がある。**

○ 小規模リソースの**動作確認の品質を確保**しつつ、**データ交換や提出様式については、デジタル革新も取り入れたやり方**を検討することも考えられないか。

② 発動指令電源に参加するリソースの継続検討

発動指令電源の範囲の見直し

○ 2024年度から開始される容量市場において、常時逆潮流しているリソースのうち、**廃棄物発電のように発動時に増出力できないリソースも発動指令電源と整理**されている。

○ 結果として、DRリソースが同種の発電機との競争によってクラウドアウトされ、**DRリソース拡大の障害になっている可能性がある。**
また、同種の発電機は**需給ひっ迫時の増出力ポテンシャルが小さく、安定供給リソースとしての確実性に欠ける**ケースもある。

⇒ 「**健全なDRの育成阻害**」や「**安定供給リソースとしての確実性**」**の観点から**、実際に発動指令時に、**容量契約通り増出力できるリソースを発動指令電源と整理**するなど、**電源区分定義の検討を継続的に行ってはどうか**。